

アメリカ文学史

齋藤 勇

アメリカ文学史

改訂増補新版



KENKYUSHA

〈検印省略〉

アメリカ文学史

(改訂増補新版)

昭和 54 年 5 月 20 日 初版発行

昭和 63 年 4 月 25 日 8 版発行

著 者 齋 藤 勇

発 行 者 石 川 雅 信

印 刷 所 研究社印刷株式会社

発 行 所 研究社出版株式会社

〒101
東京都千代田区神田駿河台2の9
電話東京 03 (291) 0951 (代)
振替口座 東京 7-83761 番

ISBN 4-327-47120-8

目 次

改訂増補新版はしがき	ix
初版はしがき	xi
緒 論	1
I. 第 17-18 世紀——植民地時代	5
i. 初期北米文学の特徴である二大精神	5
植 民	5
PURITANISM	6
FRONTIER MIND	10
ii. 清教文学 (神政論)	13
iii. YANKEEISM と資本主義の起源	21
II. 第 18 世紀末葉——独立運動時代	26
i. 独立に至るまでの一般情勢	26
ii. FRANKLIN と WOOLMAN	28
FRANKLIN	28
WOOLMAN	30
iii. 独立運動の文学	32
III. 第 19 世紀前半——文学勃興時代	39
i. アメリカの文学勃興	39
ii. 中部および南部沿岸の文学	42
IRVING	42
COOPER	47
BRYANT その他	49
POE	54
iii. NEW ENGLAND の文学	62
1. CONCORD GROUP	64

EMERSON	64
THOREAU	69
HAWTHORNE	72
2. 奴隷解放の文学——GARRISON および WHITTIER	77
3. HARVARD GROUP	79
LONGFELLOW	80
HOLMES	81
LOWELL	82
iv. アメリカ文学の独立	84
MELVILLE	84
WHITMAN	92
IV. 第 19 世紀後半——南北戦争以後	100
i. 金ぴか時代	100
ii. MARK TWAIN	103
iii. 西部地方色の文学	107
BRET HARTE	108
MILLER	109
iv. 内省の文学	110
EMILY DICKINSON	111
HENRY ADAMS	114
v. REALISM の擡頭	118
HOWELLS	119
HENRY JAMES	121
vi. 自然主義小説	125
BIERCE	126
CRANE	127
NORRIS	128
vii. 歴史小説、放浪詩および人生批判詩	129
歴史小説	129
放 浪 詩	131

人生批判詩	132
viii. 劇壇——植民地時代から第 19 世紀末まで	134
V. 第 20 世紀	137
i. 一般情勢	137
ii. 小 説	144
暴露文学と自然主義	144
DREISER	145
SINCLAIR	147
SHERWOOD ANDERSON	148
中西部の描写	149
LEWIS	149
四人の女流作家たち——WHARTON CATHER GLASGOW,* STEIN	151
LOST GENERATION の作家たち*	154
HEMINGWAY	155
FITZGERALD*	157
DOS PASSOS*	158
FAULKNER*	160
WILDER	162
1930 年代の小説——FARRELL,* CALDWELL, STEINBECK* . 162	
その他 1930 年代の小説——WOLFE,* SAROYAN,* BUCK, SANTAYANA	164
iii. 劇 壇	167
O'NEILL	168
MAXWELL ANDERSON	171
HOWARD, RICE その他	172
iv. 詩 壇	174
東部の伝統——ROBINSON, FROST および IMAGISTS 175	
中部および西部の生活——MASTERS, LINDSAY, SANDBURG および JEFFERS	178
新詩人たち——T. S. ELIOT, RANSOM, MACLEISH,	

CUMMINGS その他	181
v. 研究および批評	186
学 界	186
MORE, BABBITT など NEW HUMANISTS	188
文 壇	190
社会史的文学批評家	192
NEW CRITICISM および WILSON たち*	193
アメリカ文学史	194
vi. 戦後文学の概略*	196
南部の作家	197
黒 人 作 家	198
ユダヤ系作家	199
BEAT GENERATION	200
1960年代の作家	200
詩 人	201
劇 作 家	201
アメリカ地域区分図	202
アメリカ文学年表	205
参 考 書 目	216
索 引	239

図 版

Ralph Waldo Emerson	<i>Frontispiece</i>
Walt Whitman	<i>To face</i> 98
Mark Twain	<i>To face</i> 99
Henry James	<i>To face</i> 146
William Faulkner	<i>To face</i> 147

緒

論

拙著「イギリス文学史」において私は、自由を尊ぶと同時に法則を重んじることをイギリス国民の特徴であると言い、そしてイギリス文学の推移の跡は自由と法則との両精神が、或る時はその一方が榮え、次の時代には衰えるという具合にその消長が交錯していると説明した。

同じく Anglo-Saxon 人種が主要な構成分子であった（そして現在も恐らくそうである）アメリカ合衆国においては、自由と法則との問題がどうなっているであろう。アメリカ人は自由独立の精神だけを尊んで、法則を疎んじているだろうか。アメリカをデモクラシ^{うと}万能の国と見、そしてデモクラシを民衆の我がままぐらいのものと思い、自由を放縦の同義語とするならば、アメリカに法則を重んじる精神がない、もしくは乏しい、ということになる。しかし事實はそれに反する。そもそも Democracy は本来、有資格人民の多数の意志が支配する政治組織¹である。そして、アメリカの歴史上少なくとも初期、即ち New England の起源の頃は、法則過重の弊を伴っている。

Pilgrim Fathers が信仰上の自由を求めて New England の開拓者となったことは、まさにその通りであるが、しかしその後継者 Cotton および Mather の一族は、theocracy（神政）の名において極度の統制を強いた。その頃は政治的にも思想的にも法則至上の時代であった。

やがて独立戦争が始まると、政治的には自由のほかは何物も顧みられなかったろうと思われるほどである。けれども文学においては、第 18 世紀のイギリス詩壇を風靡した擬古典的趣味を出なかった。そしてそれは法則を尊ぶ趣味であること、いうまでもない。

第 19 世紀初葉に辺境開拓者の精神が文学に現われ始めてからは、イギリス文学の伝統に拘泥せず、何か新しいものを生み出そうとする自由の精神が見えるようになった。けれども Irving, Emerson, Hawthorne, Poe などに至っても、イギリス文学の伝統を無視したとは決していえない。むしろそれに準じようとした。ただし Whitman や Mark Twain になると、その精神においても形式においても自由が主なる特色である。取材方面は中部に移

¹ Cf. James Bryce, *Modern Democracies*, vol. I, p. 25 f.

り、やがて西部が目立つようになり、従って用語には方言がのさばって来る。

その後にも政治上または社会組織上の自由を主張する思想をもち立てた文学は数多くあるが、それが必ずしも文学として自由の精神をそなえているものであるかどうか、一概には言えない。或るイデオロギを發表しているからといって、それが即ち文学上、表現の法則を守っているものであるとも限らず、また文学的に自由の精神を發揮しているものとも言えない。政治上の自由独立を叫んでいる作品でも、はなはだ因襲的な表現法を用いている場合には、その作品は却って法則を尊んでいるものと言わなければならない。

今世紀のアメリカ文学は表現法のかなり目新しいものが多いから、それは自由を求めているものだということになる。けれども、もしその目新しい表現法がアメリカ現代作者共通の流行であるならば、それは現代の法則となりつつあるものと見られよう。

かようなわけで、イギリスの場合とちがい、アメリカの文学については、自由と法則との交流や推移を文学史上の特色であるとは言いかねる。少なくともそれが明瞭ではない。それには、アメリカが膨大な国であって、作者も地方的に様々な特徴を發揮しているということが、一つの大きな原因となっているらしい。

次に、普通のアメリカ人は何事にも自国のものが世界一であることを誇りたがるせいか、文学も世界一のものにしよう、否、すでにそうなりつつあるという風に考えたがるらしい。同じ英語と一概にいうけれども、アメリカのはイギリスのと大分ちがって来た。そのアメリカ式英語をもってアメリカのことを書いた小説は、イギリスの小説の模倣とはならない。アメリカ文学には獨創性がある。その獨創性をもってすれば、イギリス文学の追隨を許さないものとなる。すでにイギリス文学を凌ぐならば、まず世界一と言ってよからう。従って世界に誇るべき大文学を有するアメリカの文学史は、イギリス文学史やフランス文学史に匹敵するだけの大冊でなければならない。———というように考えているのではないかと思われるほど、わずか300年の過去を有するに過ぎないアメリカ文学史としては大冊が多い。

それはアメリカにおける自国文学研究の旺盛を告げることであって、結構である。どこの国でもその国の文学史があらゆる方面から精密に検討批判されたものであることは、まことに望ましい。しかし、大研究があると同時に、簡潔で要領を得た入門書もなければならない。殊にわが国においては、

それが必要である。そしてそれはその国の人の国民意識から流れ出たお国自慢を抜きにして、他の国々との比較を忘れずに、書いたものであってほしい。例えば、1200年の歴史を有するイギリス文学史が500ページとするならば、300年間のアメリカ文学の歴史は200ページでも多すぎる。この小著は、色々不備な点が多いけれども、そんな気持ちで試みたものである。イギリス人である英文学史家の書いたアメリカ文学史があるならば、参考になることが多かったろうと思うけれども、この本の初版が出た1941年頃には私はその存在を知らなかった。少なくとも有名なイギリスの学者が書いたアメリカ文学史はなかった。これはどういうわけか。一方にはJames Bryceの名著*American Commonwealth*などがあるのに、イギリスの文学研究者はアメリカ文学を軽視していたのか、それとも怠慢なのか。(Marcus Cunliffeの*The Literature of the United States*が出たのは、1954年である。)

ちなみに、アメリカ文学史の研究はすでに1829年に公刊され、1878年にはアメリカ文学研究の開拓者Moses Coit Tyler(1835-1900)の植民地時代文学史が出たのであるから、それをイギリス文学史の発達に比べればはるかに敏速であると言わなければならない。イギリス文学には第7世紀頃の作品があるにもかかわらず、文学史が、しかも詩史が初めて公にされたのは、第18世紀後半である。そしてThomas Wartonの大著が出てから100年も過ぎた後に、初めてイギリス文学史の研究が勃興しかけたのである。新興国アメリカに比べれば、イギリスの方は悠然たるものであり、また第18世紀までは遅遅たるものであった。

なぜアメリカでは自国文学の研究に熱心であるか。それは要するに、国民意識の致すところであろう。アメリカ人は第19世紀中葉にすら、アメリカ文学を読む者ありやと自ら問いを發したほどであるけれども、一方にはイギリスの作者に負けるものか、という競争心も強かった。しかしアメリカの古い大学ではヨーロッパ諸国におけると同様、語学的研究に重きを置き、殊に中世文学の調査にもっぱらであった。ところが、第一次世界大戦のためイギリス渡航が困難となり、従って直接資料がいくらでも目の前に横たわっているアメリカ文学の研究が盛んになり、文科方面では自国文学の研究を主とする大学(Duke Universityなど)もあるようになった。

国民意識の勃興から自国文学の研究が旺盛になったのであるから、アメリカにおける文学史研究法は、イギリスにおけるものとは趣を異にしている点があり、それは1920年代に著しくなった。そしてその特色は世相史的、社

会史的研究法である。文学も国民の自叙伝の一部分であるから、国民がそれぞれの時代にいかなる姿をとっていたかを明らかにするに適当な資料として文学を見る、というのが、その方法の眼目である。故にその判断は、文学としての第一義的な内在的価値 (intrinsic value) に対するよりも、当代の人々の内的生活をいかに反映しているか、またはいかに感動せしめたかという点に重きを置いている。これは確かに面白い研究である。しかし或るイデオロギの宣伝としての効果如何、または或る科学思想を適用して成功しているか否かが、ただちに文学としての優劣を決する第一条件であると考えやすい弊害を免れない。——とにかく、この社会史的研究として顕著なアメリカ文学史は、Parrington およびその流れを汲んだ Blankenship の著述であり、またこの研究法の弊害を暴露しているものは Angoff の筆に成る龍然たる二巻である。¹

この弊害はアメリカ式ジャーナリズムによって拡大されたと見てもよからう。一般読者にとっては、文学の第一義的価値よりも、日常身边に見、或いは先祖が見た物事をいかにまざまざと描いているかが、更に一層興味ある点であるから、一般読者を目標とするジャーナリズムは彼らが好むものを与える。そして文学的著述の評価ももっぱらジャーナリストによって多数決的に定められるので、文学史家も自然、ジャーナリズムに引き込まれやすいのである。

とにかく、アメリカは400年前、地理的に新しい大陸であったように、今日は一般文化においても文学においても独特なものを有する大国である。殊にわが国には、政治的、経済的のみならず、驚くべき機械文明やスポーツ、映画などによって、予想外の影響を及ぼしている。そしてわが国民の間に広く用いられている英語は、米語に変わって来た。現代アメリカ文学は、往年わが国の文学に大いなる影響を与えたロシア文学に比べて、はるかに優る勢力を占めているらしい。故に、この新興友邦アメリカ合衆国の国民性を知り、その自叙伝である文学史をわきまえておくことは、われわれがゆるがせにすべからざる、興味ある研究であり、そしてわが国一般識者の注意に値することである。

¹ 「アメリカ文学の主潮」第一章（「齋藤勇著作集」第五巻、pp. 379-91）参照。

I. 第 17-18 世紀——植民地時代

i. 初期北米文学の特徴である二大精神

植 民

アメリカの植民について、まず第一に心得ておくべきことは、イギリスからの移民に二種あったこと、即ち南方、Virginia に定住した人々はもっぱら財源を求めてアメリカに渡ったのであるが、北方、Massachusetts を中心として New England を形成した人々のうち、重要なのは、イギリスの政治と国教とに不満足なため自由の天地を求め或いは自ら正しいと信ずる所に従って、困苦窮乏に堪えながら新しい国を建てたのであるということである。

そして南部の移民は当初、文化を閑却したけれども、北部の移民は初めから宗教と教育とに心を注ぎ、従って文学はまず北部から起こった。

ところで、アメリカ文学(精密に言えば、北アメリカ合衆国の文学)の中心地について、誰しも看取すべき特徴は、それが時代によって移動したということである。¹ 即ち植民地時代はもとより、その後第 18 世紀までは、New England が文化の中心であったけれども、それから後は、次第に西へ、また南へと文化がひろまるにつれて、文学もおのずからそれらの地方色を帯びたものを見るようになり、今日は地方により、また執筆者の人種により、様々の特徴を呈しているため、一概にアメリカ文学と言っても、その総括的特質をひとまとめにしては言えないほどである。もちろんイギリス文学においても England, Scotland, Ireland など地理的關係によって English, Scottish, Irish と、おのおの特色を異にし、それらの人々が書いた文学の特質もそれぞれ違った持味のものであるけれども、その面積が僅かに独立当時の 13 州ほどもないところのイギリス即ち United Kingdom は United States に比べてはるかにまとまりがよく、統一がついている。なおイギリス国民も混血国民であるけれども、それは数世紀の経過と共にかなり融合されているので、今日のアメリカにおびたらしい人種が雑然と入りまじり、或いは散らば

¹ わが国文学の中心地が奈良、京都、鎌倉、江戸と移動したのに似ている。

っているのとは大いにちがう。

とはいえ、北米合衆国の政治史におけると同様、北米文学の歴史においても、最も重要な役割を演じて来た人種は Anglo-Saxon 系である。そして 1607 年 Virginia にイギリス植民地が開かれ、1620 年 Pilgrim Fathers が上陸して以来、アングロ・サクソン人種の指導精神となったものは Puritanism (清教主義) である。

PURITANISM

PURITANISM とは何か。それを正しく理解するには、まず第 15-16 世紀イギリスのキリスト教史を心得ていなければならない。1535 年 Henry VIII はローマ・カトリック教会を去って新たに英国国教会 (Church of England) を創立したが、それは国王の離婚と再婚との問題がからまり、そして Luther や Calvin などのような深刻熱烈な信仰上の要求からではなかったので、様々な点において不徹底であった。故に王の長女 Mary は即位後、カトリック教国スペインの国王 Philip II を夫として迎えて、イギリスにおける新教徒の撲滅を企てたほどである。Mary の後に位を継いだ Elizabeth の時代は、イギリスがスペインの無敵艦隊をも破って一躍ヨーロッパ第一の強国となった盛代であったけれども、その隆盛を来すにはこの英明な女王が何事にも民心を収攬して統制を計ることが極めて必要であった。故に宗教に対するエリザベスの態度は、表面英国国教会の最高権威を認めながら、内実はそこにかなり多くローマ・カトリック教会的色彩を残しておいて、当時なおびただしかったカトリック教信徒の歛心を買おうとする妥協的態度であった。けれどもイギリス国民は中庸を好み、法則を尊び、伝統を重んじると同時に、あくまで自由を主張し、独立を求めてやまない国民であり、そして Luther よりもおよそ 150 年前すでに宗教改革の必要を叫んだ John Wyclif (?1320-84) を初め、多くの殉教者の反カトリック教精神は決して消え去らなかつた。そしてその運動が Puritanism を起こしたのである。

つまり、英国国教会におけるローマ・カトリック臭、即ち聖書に教えていない儀礼を一掃しよう、そうしなければ Protestantism の真理は発揮されない、というのが、その主張なのである。しかるに、(1) 牧師その他聖職に在る者が礼拝の際白衣 (surplice) を着けること、(2) 洗礼の時十字架を用いること、(3) 聖晩餐や祈禱の時にひざまずくこと、(4) 婚礼の時指環を交換する

ことなどのように、むしろ瑣事と思われることすら廃止されないもので、ついに Puritans の中には国教会を追われるとも、聖書の原則に基づく礼拝様式として自ら信ずるもののほかは守らないと決心する人々も現われた。

彼らはカトリック教的残骸を留めている国教会を改革することの望みなきことを知って、John Knox (1505-72) 即ちジュネーヴで Calvin の教えを受けた Scotland の宗教改革者が作った礼拝文を用いるようになった。しかるにそれは Act of Uniformity (教式統一令、礼拝様式統一令、即ち女王エリザベスが新たに制定した祈禱書に拠らなければ公の礼拝を守ることを禁止する法令) に反するため、彼らは迫害を受けた。けれども迫害に屈して自らの良心を欺き、良心の自由を棄てることを、彼らははなはだいさぎよしとせず良心の自由のために、いささかもその所信をまげなかった。そのため彼らは公私各方面から強力な圧迫を受けたが、よくそれに堪え、よく戦った。そして彼らの戦いは Charles I の代に至り、ついに Civil War (1642-46) となって爆発し、さらに Commonwealth (共和政体) となって勝ちを占めた。

Puritanism はこのようにもっぱら信教上の立場から起こった宗教的運動であるが、しだいに勢力を占めて、政治的、経済的方面即ち一般社会生活上の現象としても観察されなければならなくなった。一体 Calvin がジュネーヴにおいて神政 (theocracy) を施いて政治と宗教とを不可分離なものとし、信仰に基づく政治でなければ正しい政治ではないと教えたことが、イギリスの(そして後にはアメリカの)宗教家が信奉した思想である。即ち神の国を地上に建設することが彼らの理想であったのである。そして神の国においては、すべての民が神の僕であって、信仰上の階級制度はない。それで、すべての信者は祭司であるにふさわしい。ローマ・カトリック教会に教皇、枢機官、司教、司祭、一般信者というように階級制があるのは、聖書に基づいたのではなく、封建制度の遺風に過ぎない。そして政治上においても、国民は平等に自由でなければならない。

しかるに英国国教会は国王または女王を教会の Supreme Head (首長) と仰ぎ、そして国教会の行政に参与する者は archbishop (大主教), bishop (主教) 以下の階級制聖職者であり、一般会員としては社会的に地位の高い者即ち貴族やその家臣などが重要視されていた。故に国教会は、専制君主政治と原則が同一である。そこには人間としての自由が重きをおかれてはいない。そこで国教会に反対する団体が起こった。それは Puritanism に基づくものであって、非国教会派即ち Nonconformity と総称され、または Dissenters

と呼ばれるものである。

そのうちまず初めに現われたのが、Presbyterian Church (長老教会) である。それは国教会のように君主制的、保守党的、Tory 的ではないけれども、寡頭政治的であることを脱却しなかった。それは従来の王侯将相に代わって、新たに擡頭しつつあった資本家や大地主即ち大体 Whigs が権力を争うようになったことである。教会では少数の presbyters 即ち elders (長老) が会員を代表して、その教会の行政に当たるのであるが、その代表者はおもに資本家から選ばれるようになったので、一般会員の権利はなお十分に認められていないという遺憾があった。¹

そこでもう一つの非国教会派 Dissenting Church が現われた。即ち Independency (のち New England では Congregational Church² (会衆派教会) 即ち戦前の日本で組合教会と呼ばれた一派) である。これはむしろ貧困で社会的地位の低い人々が教会員としても国民としても各人平等の権利を享受しようとして起こった団体であって、政治上の民主党に当たる。Cromwell を Protector (護民官) とする Commonwealth の出現はまさに彼らの勝利であった。この一派は Congregationalism の先駆である Robert Browne (?1550-?1633) の流れを汲んだものであって、Separatists (分離派) とも呼ばれた。彼らはあらゆる外的掣肘を排して良心の自由を主張し、あらゆる他律 (heteronomy) を斥けて自律 (autonomy) だけによるべきであると主張した。その生活態度は、封建制と立憲君主制との間に介在する時代の人として Puritans に課せられた原則であった。そして清教徒の中でも Separatists はこの原則を徹底させた人々である。

ただし Separatists が極端な individualism に走ったので、ローマ教会および国教会に対立する彼らの態度は漸次方向を変えて、Puritans 即ち非国教会派自体の分立および争闘となり、従って Nonconformity としての統制および集团的活動力を欠き、遂に王政回復時代に至って Puritanism は偏屈と

¹ Milton が *On the New Forcers of Conscience under the Long Parliament* と題する sonnet の終りに、

New Presbyter is but old Priest writ large.

新語「長老」は特筆大書しただけで旧態依然たる「祭司」である。と書いたのは、当時の Presbyterianism が司祭の権限を過重視する Catholicism と大差のないことを憤った言葉である。

² 個々の町や村の教会がそれぞれ 'Congregation of Saints' であって、外部から何も束縛を受けない独立のもの。

偽善との別名として物笑いの種ともなった。

しかし Puritanism の神学は王侯も匹夫も神の前には同じく罪人に過ぎないと教え、従って政治的には万人が皆同じく、生れながらの人間としての権利をもっているという思想をイギリス国民に鼓吹し、そしてその結果 John Locke をして立憲君主制を唱えながらも国民の自由を主張するに至らしめた。そしてこの点において Puritanism の貢献はイギリスにおいてもアメリカにおいてもまことに大きい。Whigs や Liberals の勃興ですら Puritanism に負う所が少なくない。¹

さて Puritans がアメリカに渡ったのは第 17 世紀の前半である。英国国教会員であることをいさぎよしとせず、信教の自由を求めて 1608 年オランダに移住した Separatists (分離主義者) は、宗教上および政治上の自由を得るために北米の新世界に住むよりほかに方法がないと考え、ひとまず母国の Southampton に帰るつもりで、二艘の帆船に乗った。その中の一艘 Speedwell は航海に堪えないのでイギリスに留まり、他の一艘だけが長い船路を経て、ようよう西の大陸に着いた。それが有名な Mayflower 号である。僅か 180 トンばかりのこの船には、100 人ほどの男女が乗っていた。彼らは聖書に、

They were strangers and pilgrims on the earth, for they that say such things declare plainly that they seek a country.²

(Hebrews, xi. 13 f.)

とあるのにちなんで自らを 'Pilgrims' と呼んだが、1798 年彼らを記念する会合において彼らの子孫は彼らを 'PILGRIM FATHERS' と呼ぶようになった。「地にては旅人またやどれる者」と思いながらも、1620 年冬 11 月 21 日、さすがに母国をなつかしみつつ、イギリス出帆最後の港と同名の Plymouth (Massachusetts) に上陸した。海に近い荒寥たる所で一年を過ごす間に、上陸当時の 102 人は 49 人に減ってしまった。³

¹ Church of England, Presbyterianism, Independency と Tory, Whig, Democrat との比較については、Vernon Louis Parrington, *Main Currents in American Thought*, vol. I, *The Colonial Mind*, chap. i や *Cambridge History of American Literature*, vol. I, pp. 32-34 を参照されたい。

² 「地にては旅人またやどれる者なり。かくいふは、己が故郷を求むることをあらはすなり。」

³ このプリマス植民地の総督 William Bradford の書いた *Of Plymouth Plantation* は John Winthrop の *New England* 史とともに初代ピューリタンの歴史書の双壁である。

イギリス人がアメリカ東南部 Virginia 州に植民し始めたのは 1607 年のことであるが、その当時すでに 100 年も前から渡米し始めたスペイン人が Mexico の北方から Florida 半島に至る間に住んでおり、またフランス人の足跡は Canada の東海岸から Mississippi の流域にまでも及んでいた。その間に介在してイギリス人は Boston を中心とする東海岸、即ち今の Massachusetts, Connecticut 両州に定住することとなった。それが当時の New England である。ところが、Boston 地方は海岸から西方 100 マイルほどまでは平地であるが、それから西は高原であり、いずれも岩石が多く、耕作地とするには骨が折れた。従って小農制の部落生活が行われ、部落の中心にはまず教会堂が立ち、人々はその牧師を万事について指導者と仰いでいた。そしてその牧師は Puritan であったから、New England の文化は Puritanism を基礎とするものであったのである。北米の英語文学がその当初、全く Puritanism の色彩を帯びて、厳正、剛直、ややもすれば律法的なものであったことは、この事情によるのである。

FRONTIER MIND

New Englanders が土着の民となつてからは、イギリス人らしい階級制度や殖産工業中心の考え方などに囚われがちになつたけれども、それにあきたらない人々は西へ西へと開拓して行くことをやめなかった。また他方、Virginia に移住したイギリス人は、New Englanders とちがい、初めから El Dorado (黄金国) を求めて来た人々なので、その土地の豊饒なことを利用してタバコ、綿、砂糖などの栽培に成功した。しかもその地形が New England 地方よりも西方進出に便利であつた。

そのほかイギリス人以外の植民も年と共に増加した。そのうち主なるものは、スコットランド系のアイアランド人である。彼らは第 17 世紀の前半に Lowlands から北部アイアランドに移住したのであるが、イギリス政府の圧制を免れるため、同じ世紀の末葉から 1718 年までにおびたしい移民がアメリカに來たのである。彼らは赤貧で、北米海岸地方一帯 (Tidewater country)¹ がすでに有力な資本家の所有地であるのを見て、‘uplanders’ (高地住民) となつた。またドイツ人は盛んに中部に進出して、今日の Cincinnati, St Louis, Milwaukee, Chicago などの基礎をつくつた。それからフランス移民

¹ 大西洋に流れる大河の河口から最初の滝までの地域、即ち潮流が溯り得る所まで、言いかえれば航海船舶が達し得る最後の上流地点までを限界とする地方をいう。